

フランスにおける「写真術の誕生」とその現代的意義(2)

大阪芸術大学 文芸学科 教授 青山 勝

【研究の目的(概要)】

本研究は、2020(令和2)年度の研究課題「フランスにおける『写真術の誕生』とその現代的意義」の研究結果を受け継ぎつつ、それをさらに発展させようとしたものであった。すなわち、フランスにおける「写真術の誕生」の経緯をその技術的要素の実証的検証(=再現実験)も踏まえて解明しつつ、他方でその現代的意義を多様な理論的アプローチで探ることを目指すものである。この目的を達成するため、今年度は当初、ニセフォール・ニエプス(1765-1833)の写真術太陽印画法(エリオグラフィ)の再現実験(版画の複製およびカメラによる撮影)を成功させ、ニエプスの写真術の発展過程の全貌を総合的に解明するための基礎を固めようとした。再現実験は一定の進展があり、それを通じて、ニエプスの写真術の発展過程への理解は深まったものの、再現実験そのものは充分「成功」と呼べる成果をあげるには至らなかった。この点については次年度以降の課題としたい。以下、今年度の主な研究成果を簡潔にまとめておく。

【今年度の主な研究成果について】

① 太陽印画法の再現実験

昨年度私は、「ニセフォール・ニエプス『太陽印画法についての説明書』(1829年)——翻訳とコメント——」(大阪芸術大学大学院芸術研究科紀要『藝術文化研究』第25号、2021年2月)を執筆したが、今年度はこうした研究成果をもとに、ニエプスの(太陽印画法)の再現実験をさらに進めた。まずUVライト等の機材を導入することで、より効率的・安定的に、また定量的に実験を進めることができるようになった。銅板、錫板、ガラス板など異なる支持体をもちいた実験も進め、それらの支持体に透明フィルムを密着させて像を焼き付け、定着させることには成功した。他方、石田ふみ氏の協力を得て、その銅板を腐食させる実験はなんとか試みたものの、現在のところ成功に至っていない(現在銅版画等で用いている腐食液は当時ニエプスの用いたものとはもちろん異なる。腐食液の濃度を変化させるなどして、今後も実験を続ける予定である)。

② ニエプス関連の原資料の再検討

上記の再現実験を進めつつ、ニエプス関連の原資料(書簡類)を丁寧に再検討する作業も行った。とりわけ、1824年ごろから「太陽印画法についての説明書」が書かれた1829年までの期間にニエプスがさまざまな相手とやりとりした手紙は、その写真術の発展過程ばかりでなく、それについての概念形成の発展過程を辿り直すためにも最重要の根本資料である。

たとえば、「カメラを使って自然を写した現存する世界最初の写真」とされるハリー・ランソン・センター所蔵の《ル・グラの窓からの眺め》(1827年頃)の支持体は錫板であるが、ニエプスは、26年から27年ごろの書簡の中で、錫板を選ぶ理由に繰り返し触れている。錫板のほうが光の反射によって「像の明るさ」が得られるからというのがそ

の第一の理由であるが、その間の事情は、①の再現実験の結果と照らし合わせることでより明瞭に把握することができる。

また、ニエプスは1827年、兄クロードに会うためにイギリスに向かうが、それがひとつのきっかけとなって完成に近づきつつある彼の写真術を説明する必要に迫られる。1826年5月26日付の手紙にはすでに「太陽印画法」の語が用いられはじめる。この語は、カメラを用いて自然の眺望を撮影する方法と、腐食によって版画を複製する方法の両方について使用される。ニエプスはその後「太陽印画法」のプロセスを説明するための言葉を模索していくが、その過程を辿り直していくとき、1827年から28年にかけてのロンドン滞在の時期がきわめて重要な時期であったことが浮き彫りになってくる。「太陽印画法」の根幹にかかわるさまざまな観念はこの時期に現れ、比較的短期間のうちに練り上げられていくのである。たとえば、「光の作用によって自動的に獲得される」といった表現に見られる「自動的に *spontanément*」という語が太陽印画法に関連してはじめて用いられるのは、1827年11月、イギリスのキューに滞在中のことであり、それがそのまま1829年の「説明書」でも使用されるのである。

興味深いのは、「自動的に」の語は、兄が開発しようとしていた「機械」(永久機関)について用いられていた語でもあったということだ。こうした点については、今後より視野を広げ、詳細な検討を進めていきたいと考えている。

③ IO-2 現代ダゲレオタイプ国際シンポジウム

2021年10月31日、現代ダゲレオタイプに関する国際シンポジウムがオンラインで開催され、ディスカッサントとして参加した。シンポジウムでは古典的なダゲレオタイプについての研究発表とともに、関連企画としてPGIで開催された展覧会「ケア:今日のダゲレオタイプ」展の出品作家等とのディスカッションの場もあり、本研究にとってきわめて有益な知見を得た。

④ 『自然の鉛筆』のレトリック戦略の検討

ニエプス研究からは少し離れるが、今年度は、もう一人の写真の発明者ウィリアム・ヘンリー・フォックス・トルボットが1844年から1846年にかけて出版した『自然の鉛筆』を近年の研究を踏まえて再検討し、その成果の一部を「もの言わぬ証言——『自然の鉛筆』のレトリック戦略」として『美術フォーラム 21 特集 ヴィジュアル・レトリック再考』(vol. 44、2021年)に寄稿した。これは、『自然の鉛筆』の中に現れてくる「もの言わぬ証言」という隠喩的表現を、この写真集全体に張り巡らされたイメージとテキストの複雑で多層的な連想の編目の特権的な結節点として着目し、そのレトリカルな含意=共示を探ったものである。こうした小さな試みも、単に黎明期の写真にまつわる歴史的な研究であるに留まらず、むしろ私たちの写真理解そのものを問い直す現代的な意味を持っていることは改めて強調しておきたい。